W校中高等部だより
のみの市特集

平成二十九年（２０１７年）十一月十一日
ニューヨーク補習授業校ウェストチェスター校



十一月十一日に中高等部主催の「のみの市」が開催されました。九月二日には第一回のみの市委員会が開かれ、そしてその日からのみの市委員を中心に、今年度の生徒会の目標の「一致団結」をテーマに、中高等部全員がそれぞれ一人ひとりが力いっぱい活動してきました。

今年は、中等部一年・二年一組・二年二組・三年生・高等部による五つのグループに分かれてブースを出し、各学年とも幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々からなるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。

九月から始まったのみの市委員会では、まず最初に収益金の寄付先を決定しました。今回の寄付金は、震災被災者への教育活動を行っているＮＰＯ法人カタリバのコラボスクールに送ることになりました。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく会議を重ねてきました。

出展内容がなかなか決まらなかったり、細かな点で意見が合わないことがあったりといろいろなドラマがありましたが、思いはひとつ、できるだけ寄付金を集めようと一致団結し、取り組みました。

のみの市当日、保護者の方々による準備から始まり、十二時少し前にはすべての準備が整いました。幼児部のかわいいお友達が来場したところから会場内は緊張感が広がり、のみの市の雰囲気が高まりました。初等部の保護者の方々や生徒の皆さん、一般のお客様、卒業生など来場してくれ、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のために最高の笑顔を作り、とても一生懸命頑張っていました。

計画に大きなずれもなく、のみの市は無事終了し、保護者の助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に今回の集計結果が生徒会会長の武神美奈さんから発表され、収益金の合計は３０６３ドル４５セントでした。３０００ドルを超える売り上げで、会場から大きな歓声が上がりました。生徒たちはこの達成感を忘れることはないでしょう。

のみの市当日、またのみの市開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様方には心から感謝申し上げます。

初めてののみの市

中等部一年一組　　鈴木　豪一

今回、僕は初めてのみの市の売る側になりました。今まで二年間、買う側でしたが、売る側になるともっと色々な経験ができて、みんなにも喜んでもらえて達成感がありました。

ゲームでは、六年生たちに募金なのでとお願いして、遊んでもらいました。幼児部の子たちは面白いからなのか、頼まなくても列ができるほど遊んでくれました。幼児部の子たちが素直に喜んでいるのが面白かったです。去年は買う側でゲームなどには参加しなかったけれど、こうやって売る側になってみると、去年もっとゲームにもお金を使っていたらよかったなと思いました。



中一のクラスでは、かき氷を出すことにしました。季節外れだとは思いましたが、去年かき氷がよく売れたという先生のアドバイスを聞いて、クラスで多数決で決まりました。実際すごく人気で、売上金は約百五十ドルでした。

雑貨では、お客さんに呼び掛けに行きましたが、呼び掛けなくても違うクラスの雑貨を見て回ってぼくたちのクラスまで来てくれることがわかったので、売る手伝いに戻りました。中君が休みだったので僕一人で大変になるかと思いましたが、すぐに交代の時間になって思っていたより楽でした。中君が休みじゃなかったらもっと盛り上がったのにと思ってとても残念でした。

あれだけ時間をかけて準備したのに、あっという間にのみの市は終わってしまいました。僕はのみの市がいろいろな人を笑顔にしてくれると嬉しいです。のみの市で買った人はおいしい食べ物や安い雑貨で、のみの市からの募金で何か買えた人はその品物で、中高等部はその達成感で、みんな笑顔になってくれればいいなと思いました。



のみの市

中等部一年一組　　ベッカー　アラン



のみの市でぼく達はいっぱい氷をかきました。クラスの出し物をかき氷にするのは、ぼくのアイデアでした。おいしんぼで前に食べた氷がおいしかったのと、毎年のみの市で氷があったからです。だからぼくのクラスで氷を作ったら、絶対売れると思いました。

ぼくの最初の仕事はベークセールの係でした。カフェテリアの反対側から、みんなが楽しく氷をかいているのを見ていました。本当は雑貨売りが次の担

当だったけれど、ぼくはまっすぐ氷かきのところへ行きました。だれも、ぼくがやっていても気づきませんでした。

ぼくは、かき氷の丸い氷を全部で三十個も使いました。いつもお客さんが来ていて氷がなくなりそうになっていたので大忙しでした。

ぼくのお父さんが買いに来た時、シロップを四杯大盛り、練乳二杯の大サービスをしました。すると女子が、

「そんなにいっぱいあげたらだめ。なくなるから。」

とおこっていました。

最後になってきたら、お客さんが減って氷が売れなくなってしまいました。それでかき氷の値段を下げないといけませんでした。最初から氷をもっと安くしていればよかったと思いました。

のみの市では、クラスのみんなとチームワークや働くことを学んだのでよかったと思います。中高等部のみんなと協力したことがいい思い出になったし、寄付もできていい気持ちになりました。

のみの市を振り返って

中等部二年一組　　吉江　ふづ喜

今回ののみの市は、私にとっては転校して来てから初のイベントとなった。のみの市は、日本でいう「文化祭」のような、生徒中心で行われるものである。

私のクラスはゼリーポンチと空気砲のゲームを出すことにした。準備の段階では、話し合いのときに話し合いになっていなかったり、人が教室にいなかったりすることが多くあり、クラス内のやる気の差を実感した。しかも、空気砲の準備を全くしていなかったのに、二週間も休校になるという異例のハプニングが起こってしまった。なので、私も含め四人ほどで空気砲は家で準備した。当日の朝、他の人にも手伝ってもらい、空気砲を完成させた。

ぶっつけ本番だったが、当日はとにかく楽しかった。小学生や幼稚園生を相手に接客するのは面白かったし、ゼリーをよそうときの流れ作業はいかにも「文化祭」のような感じがした。他のクラスを見て回り、色々買って食べたのがおいしかった。そして、このカフェテリアにそんなに人が入るのかと思って見ていたら、なんとピーク時には満員電車のようにぎゅうぎゅう詰めだった。そのおかげで、合計の売り上げも三千ドル越えしたし、クラスのゼリーポンチも完売した。終わったあとに無料で売れ残りをもらうのは生徒の特権だと思う。隣のクラスからもらった冷たいお茶は、甘い物を食べ過ぎたせいか、とてもおいしかった。





今回ののみの市で学んだことは、クラスをまとめるのは難しいということだ。もちろんみんなの思い入れもそれぞれ違うし、それなりの覚悟はしていたのだが・・・。リーダーという役の大変さと大切さも実感した。それから、空気砲の件では、すっかり特定の子たちとだけやっていた。今思えば、もっと無理矢理でも周りに仕事をふっておけば良かったと思う。来年は、もっと周りを巻き込んで、しっかり準備に取り組み、さらに楽しいのみの市にしたい。

のみの市の経験

中等部二年一組　　グレイ　ダニエル

十一月十一日はのみの市でした。今年はのみの市前の二週間、学校が緊急の休校となりました。その為、メールを通じて話し合い、準備しました。私のクラス、中二の一はゼリーポンチを作る事にしていましたので、メールを使ってゼリーの色を決めたり、誰が何を持ってくるかなどを話し合いました。当日の朝は多くのクラスメイトが早くから準備をしていました。

のみの市が始まって最初のお客さんは幼児部さんでした。狭い場所でしたが「ドラエモンのゲーム楽しいよ。」と呼び込みに初めて挑戦しました。次に私は雑貨売り場に行きました。今度は六年生の生徒たちでした。私がけん玉を持って「五十セントですよ。」と言うと女の子がそれを買ってくれました。私の初めてのお客様でした。残念ながら、その後、私は何も売れませんでした。



午後の休憩時間にお弁当を食べる事になっていましたが、母が買ったお弁当がどこに置いてあるのかわからなかったので、私はクレープを買って食べました。とても美味しかったです。その後、ゼリーポンチ売り場を担当しました。マスクを付けた時に眼鏡が曇ってしまったのでポンチを作るのがやりづらかったです。でもポンチはよく売れました。ベークセールの売り場に行った時には、もう売り切れていたので何もできませんでした。



のみの市が終わって、三千ドル以上の売り上げがあったという報告を聞きました。去年、私は突然体調が悪くなり、最後まで参加できませんでした。今年ののみの市には最後まで参加できたのでとても嬉しかったです。このお金が、被災地の子供たちの為に役立つことを願っています。

「蚤の市で感じたこと」

中等部二年二組　　シュワルツ　世音観

今年の蚤の市は去年とすごく違っていました。去年はかき氷を作って、簡単に売ることができましたが、今年は蚤の市の前に補習校が二回休校になってしまったので、蚤の市についての打ち合わせができず、メールのやり取りだけで色々な役割分担を急いで決めなければなりませんでした。メールが最初に届いた時点で、ライスクリスピーを誰が作るのかまだ決まっていなかったので、私が一種類のライスクリスピーを作ることを引き受けました。母に材料を買ってきてもらうようにお願いして、蚤の市の前日にライスクリスピーをつくりました。



当日は、蚤の市の前にほどんど打ち合わせができていなかったので、最初少し混乱していましたが、みんなでよく相談するように心がけたお陰で、少しずつ状況が整っていったように感じます。

いざ販売が始まると、残念なことに、なかなか私たちのライスクリスピーは売れませんでした。その状況に気づいたみんなが、少しずつ売り方を考え直して、自ら行動を取り始めました。例えば、ライスクリスピーを手に持ってあちこちで売り歩いたり、もっと声を出して、上手にお客さんの気を引くセールストークをし始める人がいました。その中には、授業中いつも静かにしている人もいて、私はとても驚きました。



みんなが頑張っているこの雰囲気から私も力を得て、いつの間にか私も大きな声でライスクリスピーを売っていました。そして最後には、すべてのライスクリスピーをうることができました。



蚤の市でのこの経験を通して、私はクラスのみんなと近づけたような気がします。それは次々と出てくる問題を解決するために、絶えずみんなと話をする必要があったからだと思います。その中からいつもは感じることのなかった友達の意外な一面を知ることができて、よりその人のことを理解できたからだと思います。

のみの市

中等部二年二組　　マクラヘニィ　恵

今年ののみの市は、心に残る経験でした。

補習校は、二週間も中止になって大変でしたが、最後まで頑張って、クラスのみんなと力を合わせました。私たちが作ったライスクリスピーは、ほとんど売れて、とてもうれしかったです。

ゲームは、私たちは「たたいて、かぶってじゃんけんポイ」を用意しました。友達と幼児部のみんながとても楽しそうに遊んでいて、感動しました。年下の子との関係は大切にしなければいけない、と私はこの経験から学びました。

来年は、もっとクラス全体で活動をしたいと思います。いろいろな意見を、ちがう生徒たちから聞いて、クラスごとでまとめるのが良いと思います。しかし、とても楽しい思い出ができて、先生、のみの市委員に感謝しています。

二時間の白玉作り

中等部三年一組　　豊村　真帆

今年は初めて補習校が二週間連続で休校になった。これに対しての私のリアクションは以下の通りである。

一週目、「っしゃあああ！寝られる！宿題どうせやってないし！」

二週目、「はあああ？のみの市来週なんですけど？ポスターとかゲームとか終わってないんですけど？」

という正反対の感情を表した私だった。三年連続のみの市委員に立候補した学級委員豊村は早速クラスメールを出した。先生やクラスメートとメールのやり取りをし、のみの市一週間前の土曜日と前日の金曜日に誰かの家に集まってゲームと白玉作りをすることが決まった。



そして土曜日がやってきた。おやつをつまみ食いしながら、多すぎる雑談を交わしながら、ゲームの材料のピンポン玉で遊んで行方不明にしながらと、集まった八人は工作気分でゲームを作った。学校がない分余計にテンションが上がっていたせいか、私が予想していたよりも早く作業は終わった。残った一時間をスナックタイムとした私たちはもはや遊ぶために来てるだろ、というくらい楽しい時間を過ごした。

いよいよのみの市前日の金曜日が訪れた。こねる係、成形係、茹で係、パック係という風に作業を分担し、白玉作りは開始された。茹で上がった白玉をジップロックに詰める係、通称パック係になった私は黙々と冷ます、並べる、冷ます、並べる、をリピート再生のように繰り返した。時々ちょっぴり変形している白玉を見ると、

「サイズばらけてるんだけど？ちゃんと形そろえて！」

と、私はキッチンから成形係に鋭い目を向けながら注意をした。どっかの工場だろこれ、とツッコミを入れたくなるほどの重労働のあと、ようやく最後の一個がパックに並べられた。約八百個の白玉は可愛らしい姿のまま冷凍庫に押し込まれた。



白玉作りがこんなに大変ならクレープ作りなんてブラック企業じゃん、という風に二時間の疲労を語りながらやはりスナックタイムで私たちの一日は幕を閉じた。

蚤の市を通して学んだこと

中等部三年一組　　荒木　翔満

自分は補習校に幼児部のころから通っている。思えば長く続いてきたことだ。補習校へ十年間通い続けてきてたくさんのことを学び、現地校や学校外で生かしてきた。初等部のころから抱いていた「先輩」という存在への憧れ、友人を気遣い友情を築く大切

さ、授業を受けるうえでの心得。これを全て補習校で学び、実践してきた自分は補習校に幼児部のころから通っている。思えば長く続いてきたことだ。補習校へ十年間通い続けてきてたくさんのことを学び、現地校や学校外で生かしてきた。初等部のころから抱いていた「先輩」という存在への憧れ、友人を気遣い友情を築く大切さ、授業を受けるうえでの心得。これを全て補習校で学び、実践してきた。中でも一番良い経験となり、大切なことを学べたのは蚤の市である。初等部一年から六年の時、蚤の市は見て遊ぶだけのイベントであったため、自分は「与えられる側」であった。しかし、中等部になった今では、今度は初等部や中等部の後輩たちにとって「与える側」となったのだ。この経験を通し、様々なことを学んできた。「蚤の市を成功させる」という大きな目的を持ち、それを成し遂げるための発想の柔軟性、リーダーシップ、コミュニケーション能力、その他さまざまな能力を磨いてきた。つまり、自分にとって蚤の市は一種の社会経験の場でありながら、自分に足りないものを見つけ、それを気づき磨く場所でもあるのだ。中等部三年となり、卒業まであと二年しかない。高等部になって、生徒会などといった新しい仕事ができ、後輩たちにとって学びやすい環境を作る仕事もある。新しい仕事が増え、更なる経験を積んで、自分に足りないものももっとたくさん気づけるだろう。しかし、それでも自分にとって蚤の市は自分にかけてい、社会に出たときに必須となることを学ぶ場所である。



のみの市

高等部一年　　クリーグ　イザベル

今年は初めて高校生として、のみの市に参加しました。昔、中一の頃、自分も高校生たちを見ながらのみの市の「やり方」を学んでいったけれど、今度は私が中学生の見本になる番でした。

私は高校生として、毎年作っているクレープの伝統が楽しみでした。そして実際は高二と一緒にゲームのアイデアやベークセールをやるのも楽しかったです。今年は甘いクレープとしょっぱいクレープを作りました。高二は甘いクレープの担当で、私たち高一はしょっぱいクレープの材料を持ってくる担当でした。材料はレタス、ハム、チーズとポテトサラダでした。みんなで材料を集め、クレープの中に入れ、よく売れました。



ゲームはボールを投げ、穴の中に入れるとお菓子をもらえるゲームです。子供たちがみんな楽しんでくれたので、私はうれしかったです。今年はのみの市の四年目だけど、毎年同じなのは、子供たちの笑顔を見ることです。

来年は私の最後ののみの市なので、頑張りたいです。

蚤の市

高等部二年　　押川　春香

高等部の蚤の市は、土曜日ではなく金曜日の夜から始まります。毎年恒例の伝統として、高等部二年生はクラスメイトの誰かの家に集まり、百枚以上ものクレープの皮を一晩かけて焼くのです。それが、蚤の市が最後である二年生にとっての楽しみでもあります。

今年は、例年とは少し違った蚤の市を迎えました。現地校の問題で、蚤の市の前の二週間が休校になり、私たちは本番一週間前まではあまり物事が決まっていない状態でした。私は、自分が蚤の市委員だったこともあり、当日に向けて少し不安がありました。しかし、それぞれ個人で仕事を分担し、前日にクレープの皮を百枚以上焼き、無事に当日を迎えました。

蚤の市当日はとても忙しい一日になりました。クレープだけでなく、ゲームなど他のブースも繁盛し、一人一人がきちんと自分の責任を果たし、蚤の市は成功に終わりました。今回の蚤の市で、高等部全体としても、学年としても絆が深まったと思います。あと少し、卒業までの期間を楽しめたらいいなと思います。



忘れることのない蚤の市

高等部二年　　福島　大朗

今回の蚤の市で、中一からもう5年間、毎年参加して来た蚤の市との別れを告げた者は僕たちのクラスには特に多数いると思います。その長年の努力に相応わしい終わり方だったと思います。僕にとってこのクラスは最も平凡からかけ離れているクラスだと思っているので、このように前代未聞の本番当日を迎えられて、個人的に幸福感で溢れています。完売して、過去最高売り上げを達するという理想的な形で終わるより、今回の直前2週間休校で当日本番という意外なシナリオを経験できたことがもっと、印象強く、補習校の無数の思い出の一つとして、誇っていけるとことでしょう。特に今年の蚤の市への道のりは今までとは全く違い、振り返ってみて様々な困難を乗り越えて来たのだなと、改めて感じました。



蚤の市の準備が始まった序盤のころを見返すと、毎年のようですが、軽佻浮薄な自分たちがものすごく出ていました。寄付先を始め、誰か一つの案を言うとそれに乗っかって行き、生半可な精神で挑んでいました。言い換えると他人任せな一面を持っていました。それがきっかけに、誰も案を出さずに、話が全く進まず、一番上級生のくせに、最もだらしないメンバーだったと思います。僕たちの責任感の無さにより、結局親が必死になって状況を整理していました。ほぼ毎日のように母とは蚤の市のことで話し合っていました。そこで様々な質問をされ、「まだ決まってない」や、「分かんない」など、この時期繰り返し述べていた自分が情けないと思っていました。僕たちの親も、子供達同様でとても仲が良く、協力的な親たちですが、それを頼りにしていてもダメだとつくづく感じていました。親の屋根の下で暮らせるのもあとほんの僅かだと言うのに、「これ程頼っていていいのか？」と、自らに問いかけていました。



親の力をずっと借りたまま、当日に徐々に近付いていきました。当日前の2週間が休校になったことで、皆の中でもようやく焦りが生じました。ほぼ毎日 line などで大抵同じ人が仕切り、皆が話に参加していました。それでも全く話に参加しない人も居て、レベルの低さを改めて感じ、最後の最後まで他人の力を借り、ゴールまでたどり着こうとするような人に自分は絶対にならないと決意しました。その間、話が進み、前日は誰かの家に集まり、本番への準備をすることにしました。しかしその誰かの家に泊まることによって何を得られるんだろうという疑問が自分の中で生じました。ネガティブ思考な僕だからかもしれませんが、泊まる本当の目的は来年自分たちの位置を埋める高一たちのお手本になるためだと思っていました。しかし、結局高二だけ集まり、誰も高一が何をしているのか把握せずに、日が暮れました。それにより、「泊まる意味は何なのか？」と考え、誤解かもしれませんが、やはり皆残り少ない時間を満喫したいんだなと、個人的な回答にたどり着きました。補習校というもう人生の一部と言っても過言ではないであろうものを、後数ヶ月で去ると言う恐れも皆んなの心の何処かにあるのだと思います。だからこそ、共に十何年間という長い間、週一でしか会わなかった人たちとでも、一夜でも一緒に過ごし、別れと言う逃れきれない事実を少しでも長く心の奥に閉じ込め、今を満喫すると言う意味が、家に泊まる意味だったのかもしれません。共に過ごす極僅かな時間をいかに効率よく過ごせるか、それに今立ち向かっているんだと思います。僕たち含め、今補習校が嫌だと言う人は沢山い



ると思います、でもいざ最後、以心伝心の自分たちで越えるゴールは、何よりも達成感があると僕は思っています。この「別れ」という恐怖心を誰か一人でもゴール寸前で涙に表してしまった時、他の皆も閉じ込めていた感情を溢れさせてしまうと思います。そのような思いが存在するからこそ、僕は十何年間ーそれは人の一生の中では短いのかもしれませんがー見慣れたお互いの笑顔で補習校での幕を閉じたいのです。













